

第4章

支え合いマップで見つけた 住民のサバイバル作戦

—釜石市の事例から—

住民流福祉総合研究所

所長 木原 孝久

要援護者の溢れる街－釜石 住民福祉総合研究所 所長 木原孝久

本稿は、岩手県社会福祉協議会及び釜石市社会福祉協議会のスタッフと私の3者で、既に作成されてあった支え合いマップを再度見直し、場合によっては現地まで出向いて住民にも面接し、改めて分析の手を加えた上で、まとめたものである。執筆したのは私（木原）なので、この内容についての責任は私が負うことになる。当然執筆者個人の考えが反映されるので、その点も考慮して読んでいただく必要があるだろう。

これから日本が直面するはずの超高齢社会に既に突入している同市をモデルにして、住民のサバイバル作戦を抽出することで、他の多くの市町村の参考にしていただけるものと考えている。このような住民の巧まさる知恵は、全国のどこでも発見できるからである。

■住民の「見えざる意思」をマップで視覚化できないか

釜石市は、日本の数十年先を行っている地域だと言われる。超高齢者や要介護者、様々な障害を抱える人たちが（少しオーバーかもしれないが）地域にあふれている。一方で、要援護者を支える資源として期待されるはずの若者が少ない。被災地であり、自然も厳しい。そんな環境の中で要援護者はどうやって生き延びたらいいのか。

と言っても、彼らは現にそういう悪条件の中でもたくましく生きている。住民はそのためにはどんな手立てを考えたのか。もちろん、一人ひとりがそんなことを意識して日々を生きているわけではない。個々の意思は意思として、地域全体で無意識の中に、生き延びる知恵を發揮しているのではないか。それを支え合いマップ作りで視覚化できないものか。

■支え合いマップ作りにはこれだけの可能性がある

支え合いマップといえば、気になる人を探し出し、その人に誰がどのように関わっているかを特定するものだが、「気になる人」探しに終始しているケースが少なくない。あるいは、そのご近所に世話焼きさんはいるか、その人が誰と誰に関わっているかを探し出し、その活動をバッタアップしたり、その情報能力を生かすことを考える。

無論そういうマップ作りもいいのだが、もっと視野を広げて、冒頭のような課題もマップで考え、ある程度の解決策を導き出せないものかと考えることもできるのだ。住民の個々の動きや、その地域の特性、地理的な環境などを総合的に視野に入れて、その地域の住民はどのように悪条件を乗り越え、少ない資源をフル活用して、あふれる要援護者を支えようとしているのかを、読み込むのだ。住民たちの「見えざる意思」を明らかにするのである。

このように、マップ作りは様々な可能性を秘めているのだ。

■サバイバル作戦のパターンに絞ったマップ

なお本稿に掲載するマップについては、特殊な作り方をしている。通常、支え合いマップを取り上げる場合、地名を伏せた上で、さらにマップを匿名化するのだが、本稿のテーマが釜石という特定の地域に絞られているため、以下のような方法を使うことにした。

本稿の目的は、住民のサバイバル作戦を紹介することである。そこで、全ての事例で同じ架空の住宅地図を使用し、大事なポイントだけをシンボル化して表示することにした。例えば1人の大型世話焼きさんが10人の要援護者に関わっているという場合、その事実だけを記号化してマップに載せ、家の位置などの詳細は架空のものになっている。

■本気で助け合いをしたいと思ったからこそ50世帯に限定した

住民が本気で助け合いをしたいと思えば、人口何千人の広大な圏域で助け合いをしようとは言わないはずだ。関係者やボランティアのリーダーたちが、漠然と「助け合いのまちをつくろう」という場合はそれでもいいが、「本気で助け合いたいのだ」と思えば、助け合いの圏域をぐっと狭めるのが住民のやり方である。

あとでご紹介する事例からも、そういう「意図」が見えてくる。例えば、こちらは圏域を区切らずになんとなく有償サービスを始めたのだが、住民はお金を払えばそれで済むのに、「お返し」をしている。お返しをするというのは、ご近所での助け合いで住民が意識した証拠なのだ。

といえば担い手も、サービスを受ける人たちも、およそ50～60世帯の狭い圏域で生活していて、要するにこれは、有償というやり方を使いながらご近所での助け合いを進めているのだということが分かった。市域全域をカバーする一般的な有償サービスではなかったのだ。

この有償サービスが行われている地区に限らない。他の地区でも、町内自体は数百世帯なのだが、その中で実際に助け合いをしている範囲を区切ると、やはり50世帯程度の「ご近所」になることが分かった。要援護者があふれて、なんとしても助け合いを強化しなければならないと住民が本気で考えたからこそ、助け合いはご近所ごとにしようとを考えたのではないか。

1 大型世話焼きさんがキーマン

後述するように、住民の助け合いの原点は、特定の人とのペアの関係である。しかしそれだけでは、ご近所全体での助け合いに広げるのは難しい。どうしても、一定数の世話焼きさんの存在が欠かせない。

ここに紹介するマップには、大型世話焼きさんが2人もいた。これなら助け合いは万全だ。

一口に世話焼きさんといっても、10人程度の人に関わる大型世話焼きさんもいれば、5人程度に関わる中型世話焼きさん、1人、2人に関わる小型世話焼きさんもいる。このご近所に

は、大型の世話焼きさんが2人もいたのである。いずれも天性の資質の人で、そのテクニックも、誰かに教えられて習得できるものではないのだ。

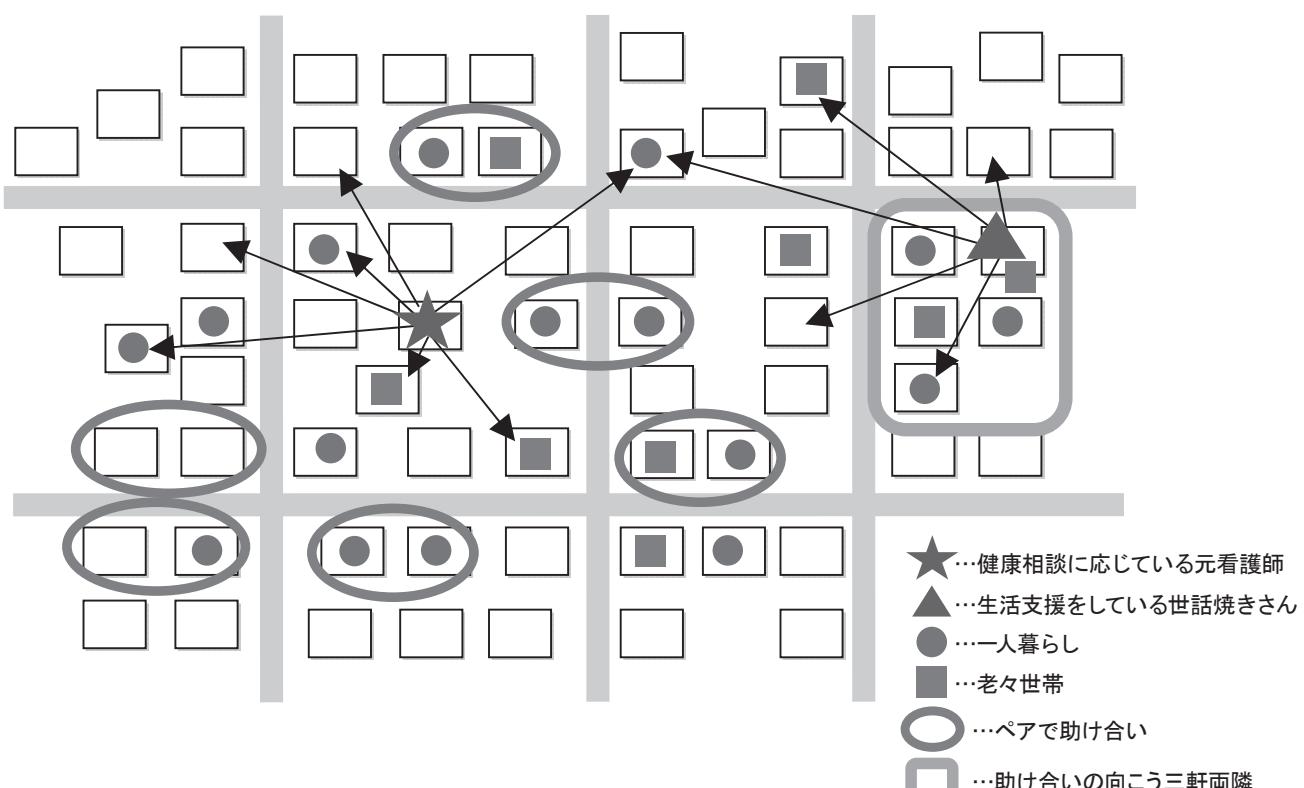
(1) 元看護師が「ご近所診療所」

マップを作ると、大抵、ご近所内に1人か2人は元看護師の人がいて、ご近所の人たちの保健・医療相談にのっている。積極的に相談に乗っている人もいれば、来れば乗ってあげるという程度の人もいる。

このご近所の事例は、尋常ではない。私はよく、こういう人について「ご近所診療所」という言い方をしているが、この元看護師の女性は文字通りの「ご近所診療所」の役割を果たしていた。

彼女から、「例えば」と言って聞き出した活動例だけでも、ご覧のとおり6ケースに上る。ご近所内のほぼ全員の相談に乗っていると言ってもいいようだ。

- ① Aさん。頭痛、手足のしびれの相談。通院を勧める。
- ② Bさん。糖尿病。栄養のある食事をとるようアドバイス。
- ③ Cさん。糖尿病。通りがかりの際、適度な運動を行うように声掛け。
- ④ Dさん。自分本位で、人の悪口を言う。「みんな、人それぞれなんだからね」となだめている。
- ⑤ Eさん。解離性障害で一時危なかったが、現在は落ち着いた旨相談を受けた。
- ⑥ Fさん。精神障害。「泥棒が入った。台所を汚された」との被害妄想の電話があった。落ち着くまで話を聞いている。



(2) 「押しかけ便利屋」型の世話焼きさんも

もう一人は男性だ。彼は、ご近所の生活支援をしてあげている。頼まれてやる場合と、気付いたらやってあげる場合があるが、彼は特別級で、しかも「押しかけ」型。気がついたら我家の庭に入ってきて、塀の修理をしている、といった感じなのだ。

もちろんお金が欲しくてやっているわけではなく、本人は楽しんでやっている、と奥さん。便利屋活動の前に、彼とご近所との関係の線を引いたら、たくさんの人とつながっていることがわかった。

生活支援と言えば、今の住民にはそこまでは無理だと思われがちだが、彼の活動ぶりを見ると、住民の可能性は無限大ではないかとさえ思ってしまう。彼がやっていることを一部例示すると…

- ① Aさん一家の中の整理。布団干し。草刈り。
- ② Bさん—墓の掃除。簾の掃除。
- ③ Cさん—簾の掃除。
- ④ Dさん—屋根の掃除。
- ⑤ Eさん—草刈り。植木の手入れ。塀の掃除。

「福祉は関係者が担うもの」という考え方が、長い間に常識化してしまった。おかげで「住民は見守り程度をやっていればいい」と、関係者は住民にほとんど期待をかけなくなってしまった。

そんな中で突如として、生活支援を住民にも担ってもらおうということになった。しかし相変わらず「住民にはそんなことはできない」という思いがあって、結局は有志の住民、あるいはN P Oで組織活動として担うより仕方がないということになりつつある。

しかし、ご覧のように、支え合いマップ作りをして、実際に住民が担っている生活支援の部分を抜き出してみると、とても軽視できないケースも出てくる。こんなことが生活支援かと疑問に思う向きもあるだろうが、住民一人ひとりにとってはこれらが全て「生活支援」の中に入るのだ。

(3) 保健センターや生活支援コーディネーターのご近所支援拠点に

といっても、ここは2人の世話焼きが頑張っているからいいね、で済ませてはいけない。これを関係機関がバックアップする必要がある。保健センターや地域包括支援センターが、元看護師の女性宅を訪れて必要なアドバイスをすればいいし、逆にそこからセンターの側が得られる情報やノウハウもあるはずだ。

便利屋型の世話焼きさんの方も、生活支援コーディネーターがバックアップしていい。コーディネーターも、足元で住民にどんな生活支援対応のニーズがあるのか教えてもらえるのだか

ら、助かるはずである。

関係機関の人たちは、今は市の中心部にいて、ニーズがやって来るのを待っている。しかし、これでは、本当のニーズがどんなものなのかは分からぬ。それを把握するためには、ご近所まで来て、そういうニーズに実際に対応している人と接触する以外にはないのだ。

2 要援護者同士がペアで見守り合い、助け合い

同じマップの中で、助け合いのご近所をつくっていく上で欠かせないある手法が使われていた。大型世話焼きさんが複数の要援護者の面倒を見ている一方で、要援護者同士がペアで助け合っているのだ。

(1) 一人暮らしの人が数軒隣り合っていると、間違なく助け合っている

当事者は当事者で、それなりの自助努力をしている。マップを作ると、一人暮らしの人（特に女性）の家が数軒かたまっていると、間違なく助け合っている。大抵は3～5軒の範囲でグループができている。その中の1人がリーダー的な存在で、他の人はその人を頼っている。通常、男性はこういうことをしないが、興味深いのは、女性数名の中に男性が入っている場合があることだ。別に交流の輪にまでは入っていないが、それとなく皆で様子を見るなどして、この人の見守りは女性たちによってなされている。その代わり、力仕事などの役割が女性から回ってくる。

(2) ご近所内に6つのペアができていた

マップを見ていただきたい。一人暮らし高齢者を中心に、老々世帯も含めて、当事者同士、一人対一人でペアになって、見守り合い、助け合いをしている。1回のマップ作りで見つけたペアだけでも、6つ。いずれも隣同士、又は向かい同士である。向かいと言っても、入り口（玄関）が背中合わせだと、見守りようがない。そういう場合には、斜向かいの人とつながるというケースも見かけられる。

(3) ちょっと離れたペアが2人とも孤独死

そのペアの間の距離が離れていたケースで、孤独死が生まれた。むろんそれだけが原因だったとは言えないが、両者の間に2軒の家があった。このペアの両者が共に孤独死してしまった。

周りの人に聞くと、カギの預け合いもしていたという。1人は、カーテンが開いていなかつたことから、息子さんに連絡して発見された。

50軒が「顔が見える」範囲だと住民は見ているが、お互いの安否を確認するのなら、厳密

に言えば、やはりお隣でなければ見えない。その意味では、隣同士のペア方式が、お互いが意識しない間にご近所内に広がったというのは、確かにいいことだ。

(4) 向こう三軒の助け合いも

向こう三軒両隣、つまり4、5軒での助け合いの事例もこのご近所にはある。マップの中の、ピンク色の四角で囲った部分を見ていただきたい。この5軒では、垣根が取り払われている。オープンな長屋と言ってもいい。この中に前述の押しかけ便利屋型の世話焼きさんが入っているので、おそらくこの人が仕掛けたのだろう。

こういう向こう三軒ができているところでは、優秀な「開かせ屋」さんがいるのが常である。その人が隣人宅に上手に入り込み、自分も隣人を自宅に招き入れる。その人に巻き込まれて、お互いの家が開き合うようになるのだ。

このご近所は、まず①大型世話焼きさんが周りの人たちの面倒を見ている。その一方で、②要援護者がそれぞれペアで見守り合うことで、最低限の安全を確保しようとしている。さらにその中間体として、③向こう三軒両隣の規模での助け合いも行われている。

要援護者があふれるまちでの住民の自衛策の一つが、こういう図式になるのだ。ただここに示したように、一人暮らしや老々世帯の人たちがペアになって助け合う構図がこれだけ広がっているのは珍しい。もしかしたらマップを作る側が気付かないだけで、どの地区でもたくさんペアがあるのかもしれない。

3 世話焼きさんが施設に入所してご近所は「困った」

ご近所で世話焼きさんとして助け合いの指揮を執っていた世話焼きさんが、もし老人ホームに入所してしまったら、どうなるか。じつはこういうケースがよくあるのだ。ケアマネジャーもこのことを頭に入れておく必要がある。

■施設と話し合い、盆と正月には里帰りする約束を

次のマップでは、約50世帯を束ねていた世話焼きのAさんが、娘さんの住む都会の施設に入所することになった。

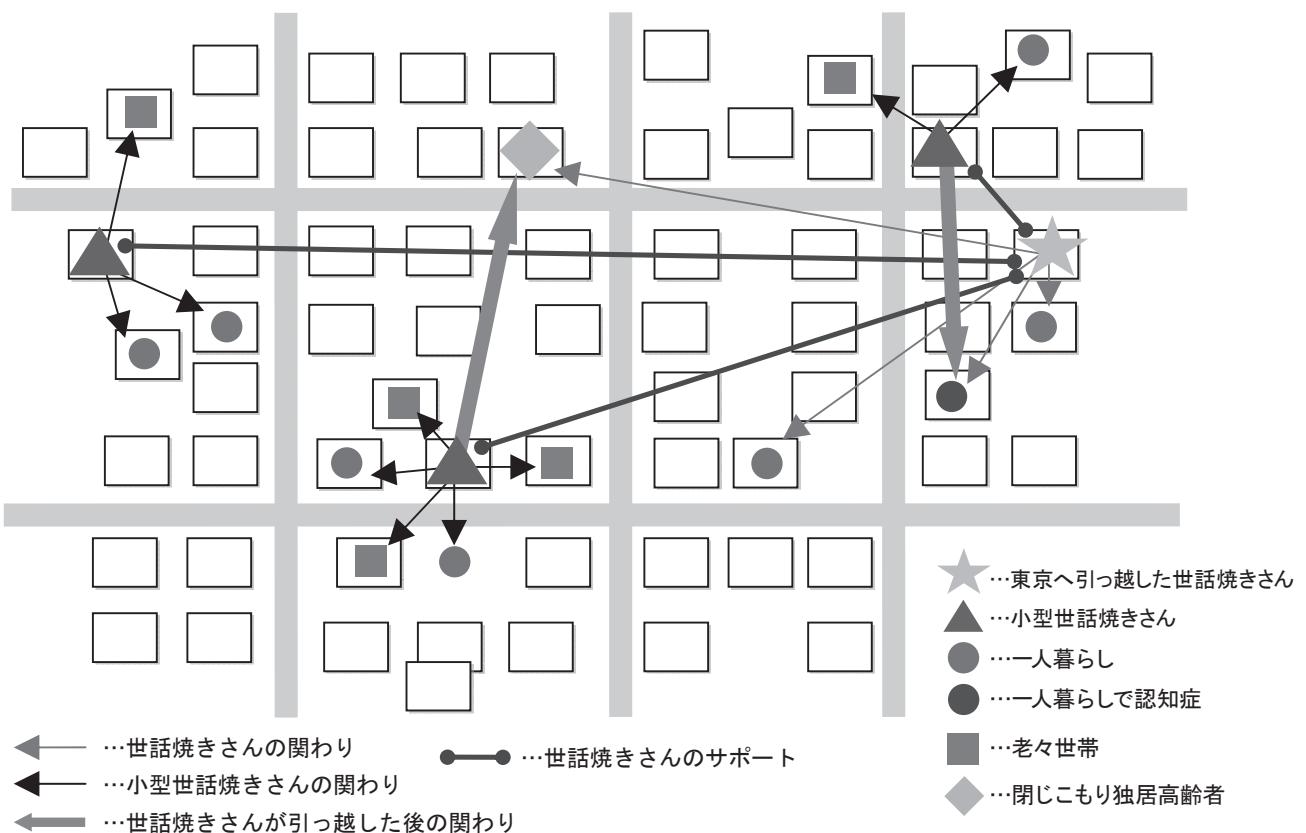
Aさんに束ねられていた小型世話焼きさんや、高齢者は不安を抱き、ご近所福祉は大ピンチになった。

そこでAさんは、娘さんと施設と話し合い、盆と正月には里帰りする約束をとりつけた。彼女が世話焼きとしての役割を果たし続けられよう、である。異例の、世話焼き活動のための里帰りだ。

■彼女にかかれば、どんなお宅でも玄関がひらく

Aさんは天性の世話焼きさんで、ご近所をくまなく知り尽くしていて、認知症の高齢者や知的障害を持つ人の家をこじ開け、お世話をしてきた人である。「彼女にかかれば、どんなお宅でも玄関がひらく」という。そんなAさんの里帰りを、ご近所の小型世話焼きさんや助けられ上手さんは首を長くして待っているのだそうだ。

このご近所は、東日本大震災によって津波に直撃された地区である。約半数の世帯で家が流失し、今でも避難生活を余儀なくされている地区である。従来あった地域のご縁も津波とともに失いかけている。



■里帰りのたびに現役の世話焼きさんを指導

Aさん不在の間に東ね役に成長したBさんは、涙ながらに語ってくれた。Aさんが里帰りをして、みんなが集まると、まるで震災前に戻ったようににぎやかになるのだと。「みんな年をとつたり家族を失ったりで大変だけど、こうして馴染みの顔ぶれで世間話をするのがいちばん薬になるみたい」。

Aさんは里帰りのたびに、ご近所の近況を聞き取りながら、誰には誰が関わるといいとか、あの人はこれが得意だからそれでお返しさせてなどと、現役の世話焼きさんを指導している。Aさんが世話をしていた認知症の一人暮らし高齢者は、現役の世話焼きさんが見事にフォローして在宅生活を維持していた。

また、津波により伴侶を失い漁師の仕事も失った男性Cさんは、ご近所とのつきあいを断つ

ていたが、Aさんだけは受け入れていた。CさんはAさんに説得され、Bさんら現役の世話焼きさんを受け入れるようになったようだ。

■担い手と資源の両役を両立させるようマネジメント

Aさんは、後輩世話焼きさんを前に、「皆がいるなら私も帰ってこようかしら」と話しているという。もしかすると実現してしまいそうだから、頼もしい。世話焼きさんは一生現役であるべき、と福祉関係者は認識を改める必要がある。

こういう事例は、マップ作りをしているとよく出てくる。大型世話焼きさんだった人が施設に入所したおかげで、そのご近所が壊れてしまったというケースである。だから、ケアマネジャーがケアプランを作る場合、その人が地域で果たしてきた役割をしっかり頭に入れて、それを生かしたプランを立てる必要がある。

こういう大型世話焼きさんの場合は、施設入所ではなく、なんとしても地域で生きていけるようにするのだ。そのためには、小型世話焼きさんなどをうまく生かしながら、彼女の介護資源も確保しつつ、当人の資源としての役割も果たしてもらう。今の関係者に求められるのは、相手を担い手か受け手かに区分けすることは絶対にしないということである。誰もが両役を持っていて、その2つを両立させるようにマネジメントするのだ。

4 大型「世話焼かれ」さん（迷惑かけ屋さん）

（1）ご近所には助けられ上手さんが

助け手として多くの人に関わっているのが大型世話焼かれさんだが、その逆に、1人が複数の人を活用して自分の安全を確保するというあり方も、ご近所では普及している。

私はこういう人を「助けられ上手さん」と呼んでいる。例えば要介護の夫を介護している女性が、周りの人にいろいろ“指示”している。「すみませんが夫を病院まで乗せてください」「ストレスがたまっているので、あなたのグループに入れてね」「私は介護で外に出られないで、私の家におしゃべりに来てね」といった具合に。

こう聞くとずうずうしいと思われるかもしれないが、実際に頼まれた人は不快には思っていない。私たちは、あの人をどう助けてあげればいいか分からぬ。だからしてほしいことを指示してもらえば助かる。じつはご近所という所では、当事者が担い手を動かすものなのである（誰でもできるわけではないが）。引きこもりの人でも、よく調べると、2人程度には、それとなく頼み事などをしていることが分かる。

（2）彼女が借金をしている相手、お花をちょっと拝借の相手

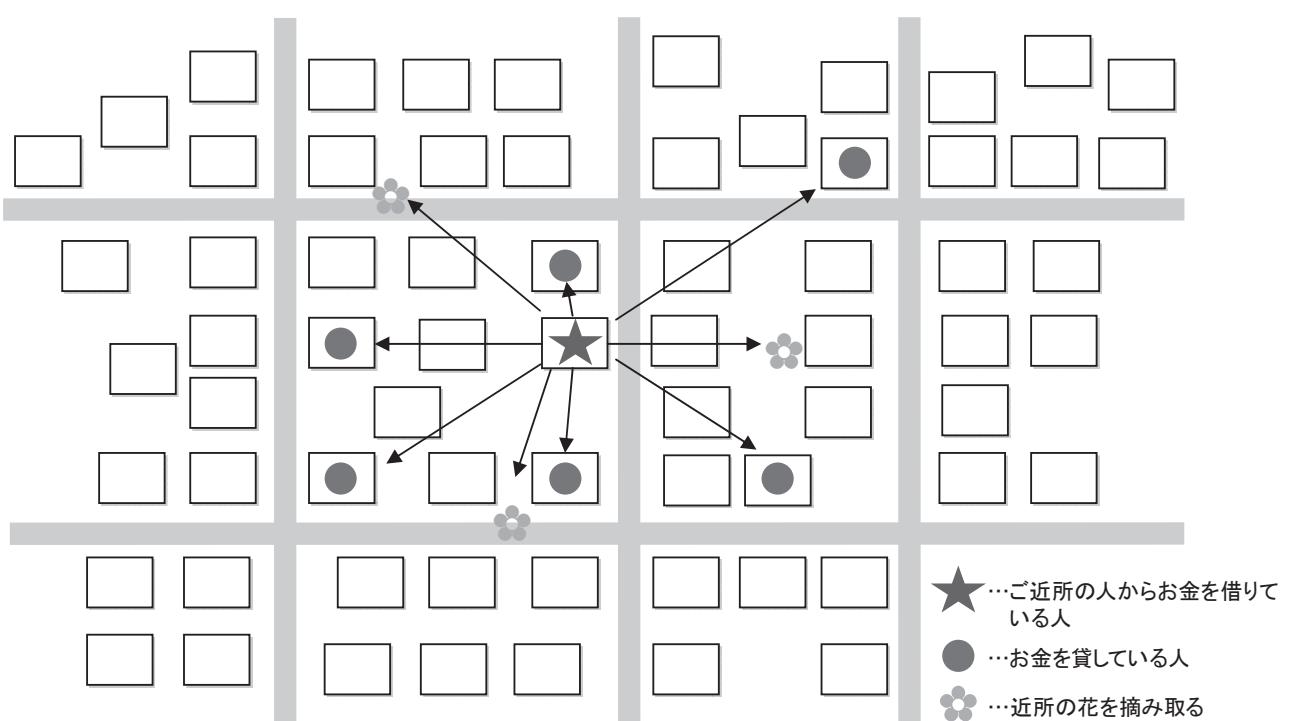
ところで次のマップを見ていただきたい。1人の人から周囲へ6本の線が走っている。何の

線かと言えば、この女性が借錢をしている相手である。これだけの人にお金を借りていて、それでよく相手も貸すものだと思うのだが、おそらくきちんと返しているのだろう。しかし、返せるのなら、借りる必要がなさそうにも思える。そこが不思議なのだ。

もう1つある。マップを見ると、この女性の周りにある特殊な印がしてある。彼女がこの辺りで花を失敬しているらしい。ちょっと拝借したに過ぎない、と彼女は思っているのだろう。現に、とられた方もそれほど気にしていない。

(3) 一種の「ふれあい願望」なのか？

これは一体どういうことなのか。彼女はこういうことをして何を得ようとしているのか。もしかしたら、これは一種の「ふれあい願望」なのかもしれない。ならば普通に、サロンにでも行けば済むことなのだが、そこは地域の面白さというか、本人は借錢をするという形でふれあい願望を満たそうとしているのだ。たしかに彼女にお金を貸せば、返してくれるまで彼女への関心は継続する。自分に対する关心が継続している間は心休まる、といったことなのか。



支え合いマップ作りをしていると、こうした変則的なふれあい願望の事例にぶつかる。ある地区では、近隣の家々を訪れては、暴言を吐いている人がいた。言われた方は意味が分からず、キツネにつままれた気分であろうが、一種のふれあい願望ではないかとみんなで話し合った。その地区には、やはり釜石と同じように、近隣の人にやたらと借錢を繰り返している人もいた。ふれあいたいという欲求を素直に表現できず、おそらく本人も無意識のまま行動しているのではないか。

(4) 迷惑を甘んじて受け入れる人が一方ではいる

こうした人々の変則的な願望の対象にされた方の人は、たまたまものではなかろう。しかし、ここがまた地域の面白いところなのだが、迷惑だと思いながらも、その迷惑を甘んじて受けている人がいる。甘んじて受けている人に対して、彼女は迷惑をかけていると言ってもいいかもしれない。迷惑を受け入れてくれる人というのが、一方ではいるのだ。

ある地区で、すごい「迷惑かけ屋さん」を見つけた。迷惑をかけている相手はといえば、なんとその数、13人。どういうふうに迷惑をかけているかと言えば、例えばこんなふうだ。早朝5時ごろに「ピンポーン」と来る。この時間帯のピンポーンなら緊急事態かと、あわてて玄関を開けると、彼女が立っている。何事かと身構えると、彼女いわく「ヌカミソの漬け方を教えて！」。そんなことなら昼間来ればいいのにと言えば、「今教えて」。そんな無茶な要求は断ればいいのにと思うところだが、そうするといかにも悲しそうな顔をするので、それもできないという。応じてあげると、後でおすそ分けを持ってくる。そういうところはちゃんとしている。だから余計に断れない。

もしかしたらふれあい願望というより、ただ、そういうことをしたいだけなのかもしれない。借金をする。それを返して、また借りる。あちこちのお花をちょっと拝借する。それをして心が落ち着く。

それを心置きなくさせてあげている「迷惑受け入れ屋さん」が地域にはこんなにたくさんいるのだ。それこそが驚きかもしれない。

(5) 認知症になってもしたいことをさせてもらえるまち

高齢者という、長い人生を歩んできた人たちが多く暮らす地域では、こういう「一癖も二癖もある」人が地域ごとに少なからずいるのは仕方がない。それに認知症の広がりもある。彼らを温かく見守り、迷惑を甘受してくれる人たちがたくさんいるというのは、これもまた一つの大資源見ていいのではないか。福祉のまちづくりの基盤は、こういう地域なのかもしれない。

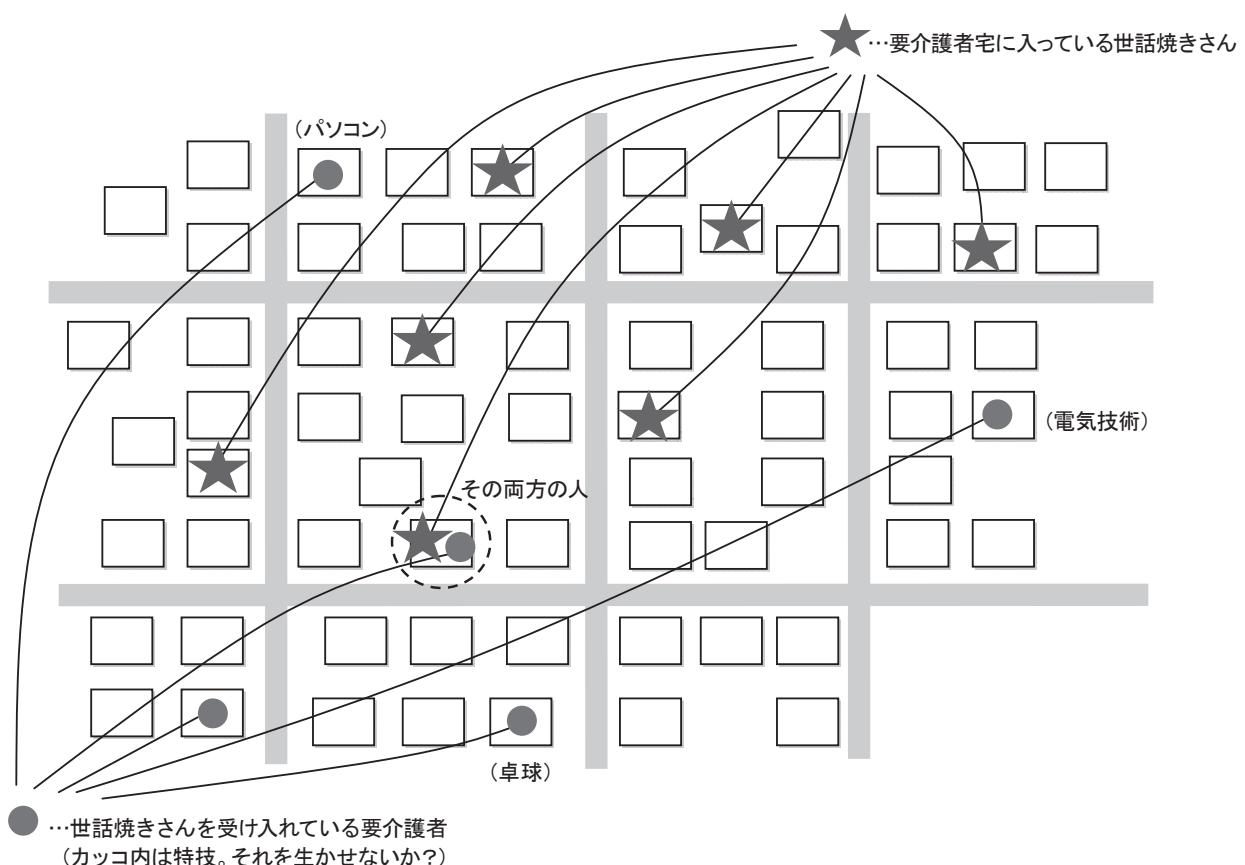
最近は認知症を支えるまちづくりが広がっているが、そこで何よりも求められるのは、彼らが安心して歩けること、そこでしたいことをさせてもらえること、常識的ではないことをしても許してもらえることである。釜石はそういう好条件が整っているということかもしれない。

5 要介護者の家に入り込める地域

(1) 要介護者はヘルパーが担う、と決まったわけではない

要援護者のあふれるまちとなれば、要介護者も相当な数になるはずである。その中には認知症の人もいる。となれば、頼りはヘルパーで、介護保険ということになる。しかしこからの大介護時代では、要介護になれば即ヘルパーなどとは言っていられない。住民が担わねばならない部分はいくらでもある。

次のマップを見ていただきたい。「要介護者の家に入り込んで世話を焼いている人」がなんと7人もいた。その対象となっている人が5人。都市部ではこんな家が一軒でもあればいい方ではないかと思うが、それがこんなにもいた。どうしてこんなことができるのか。要介護者を支えるとなると、それがたとえ「二次介護」であろうとも、その家に入り込まねばできない。



ここでいう「二次介護」とは、直接体をふいてあげたり、おむつを交換してあげることでなく、例えば介護者ができない部分、買い物をしてあげたり、洗濯物を干してあげたりといった、特に介護者の周辺的なお手伝い、あるいは要介護者のお楽しみ事に付き合ってあげるといったことも入る。

それにしても、要介護者のいる家に入り込めるというのは、よほど開かれた地域ではある。

(2) 介護保険以前には「おむつ替えの名人」がいた

私は介護保険制度が始まる前からマップ作りをしているが、その頃は「おむつ替えの名人」が各地にいた。釧路の名人は、毎日、数名の家を訪れておむつ替えをしてあげていた。その後、対象者が増えたので、ピアノ教師をしている娘さんも手伝っていた。

柏崎市の名人は、老人ホームを訪れると、寝たきり老人たちが「〇〇さん（名人の名前）におむつ替えをしてもらいたい」と駄々をこねるのだった。

これらの女性たちは、自分が名人であることをちゃんと意識していた。私にもそのテクニックを披露してくれたが、なるほど、おむつ替えはプロの方がうまいはずだというのは思い込みだったと感じたものである。

自分の排泄物を体中に塗った高齢者を見事にピカピカの体にしてあげた人もいたが、その手腕に、これはもう芸術ではないかと感動した。「住民介護」という世界と技術というのもあるのだ。

(3) 「住民介護」が可能な5つの条件

住民が介護まで担えるには、いくつか条件があることが見えてきた。ここに5項目並べてみよう。

①一人暮らししなら入り易い。

マップを作っていて、住民が要介護者の家に入る場合、一人暮らし高齢者なら特に入り易いということが分かった。一人暮らしで要介護となれば、「私のことは放っておいて」というわけにはいかない。健康な高齢者でもいろいろ困り事があるのに、加えて要介護なのだから、助けの手を拒否する人はまずいない。

釜石の場合のように、一人暮らしの人が多いということは、一人暮らしで要介護というケースが一定数出てくる。一見大変なようだが、周りの人が入り易いという利点が生まれるのだ。マップに出ている5軒のうち、一軒は嫁と2人暮らしだから、なかなか周りの人が入りにくい。その人は認知症で、嫁のいない時間帯に周りの人に助けてもらったり、交流をしている。

②嫁や子どもが支援を求めれば入り易い。

嫁や子どもがいる家は入り易いが、一方で、その嫁や子どもが周りの人の支援を積極的に求める場合は、もっと入り易くなる。

釜石の事例ではないが、他地域に住む娘が要介護の親を一人暮らしさせていた。もちろん本人の意思であるが、娘は心配である。そこでその娘さんは、母親の近所の人たちを時々巡回して、「母のことをよろしくお願いします」と言っていた。しかも驚くことに、介護保険サービスも、わざと入れないでいた。つまりご近所の人たちの善意に全面的にすがろうとしたのだ。こうすると、ご近所さんの姿勢はかなり違ってくる。

そういう娘さんと一緒に、ご近所周りをしたことがある。一人暮らしをしている母親の周りの5軒を丁寧に訪問して歩く。するとお願いされたご近所さんがこう言っているのを聞いた。「あ

なたがこうしてお願いに来るから、私たちもお母さんの家に上がるんだよ」。母親のことを任せられた、という風に受け取るのだ。

③親戚関係が多いご近所だとお互いに入り易い。

これは当たり前のことだが、マップの地域も親戚関係が多く、互いに○○ちゃんで呼び合っていた。だから家にも入れるし、介護の手伝いまでできてしまう。「デイサービスはつまらないだろうから、私たちが入る」と言って、かなり強引に入っているケースもある。

④世話焼きさんなら入れる。

上記のような条件がそろったうえに、世話焼きさんなら、ますます入り易い。マップの7人は、「7人の侍」と関係者が呼んでいるほどの世話焼き軍団である。彼らが動けばできないことはない。

⑤介護経験のある人なら入れる。

この軍団の人たちは、今までに介護の経験を積んできた人たちだから、介護の手伝いといつても戸惑うことはない。この年齢の人たちは、介護保険以前に肉親の介護をしてきているから、介護を特別な営みとは思っていない。

6 担い手と受け手の区分けをしない地域

(1) 対象者の中にも担い手の中にも入っている女性

マップの「7人の侍」の1人（点線の丸で囲まれた人）をよく見ると、この人は受け手の5人の1人でもある。つまり、両方の役割を果たしているのだ。別に奇妙なことではなく、住民は常にこういう方法を取っている。

この人は元民生委員で、今は認知症になっている。嫁がいるときは大人しくしているが、嫁が外出すると、地域を歩き回る。なにしろ元民生委員だから、地区内の要援護者ことはよく分かっている。だから訪問活動をまだ続けているのだ。

(2) 認知症だからこそ人の役に立ちたい

これはなにも元民生委員だからというわけでもない。オーストラリアの首相・内閣省の第一次官補を務め、とてつもなくIQの高いことで評判だったクリスティーン・ブライデンさんが認知症になり、洋服を着替えるのにも苦闘するようになった。彼女が2冊の本をまとめたが、その中で言っていた。私たちは日々、何かを失っていく。そのことが人間としての自信を失わせている。だから、私もまだ人の役に立てるのだと思いたいのだと。人に尽くせるということが、私のプライドを修復させるのだと。

要介護の人ほど、人に尽くしたがっているということは、よく知られた事実である。

(3) 民生委員のように振る舞うのをみんなが受け入れる

誰かに助けてもらわざるを得ない人は、「お返し」としてできることを必死に探そうとする。そうでないと「助け合い」の世界から外れてしまう。単なる「対象者」の位置に据えられてしまう。これはつらい。

周りの人たちも本人の心理はよく分かっているので、本人が担い手であるかのように扱う。彼女が以前の民生委員の時と同じように、地域内の家を訪問して歩いているのを、住民は黙って受け入れている。そして、危ない所に差し掛かると、周りの人がじっと観察し、必要な時はさりげなく手を出す。という意味では、彼女は「7人の侍」のメンバーのままなのだ。

要介護者たちがいかにも担い手であるかのように振る舞っているのを、温かく見守っている地域—これこそが本人の誇りを守ってくれるという意味では、極めて意義深い。要援護者があふれる釜石だからこそ、当事者の願いがよく分かっているし、その願いを地域ぐるみで受け止めているではないか。

このご近所の他の要介護者についても、特技があることが分かったので、これらを生かせないものかとご近所さんたちは考えている。1人はパソコン、1人は電気技術、1人は卓球といった具合である。

7 担い手が関わりやすいように「見守られ集団」

(1) 一人暮らし高齢者宅に地区内の人暮らしが集まる

次のマップを見ていただきたい。最上部の人の家でサロンが開かれていて、そこに近隣の6軒から毎日のように人が集まっている。これだけの事実からでは、このミニサロンの意義は分かりにくい。しかし、それぞれの参加者の状況を調べると、その意味が分かってくる。集まる人の中の4軒は一人暮らし。1軒は老々世帯。そして残る1軒は民生委員。しかも主催者も一人暮らしの高齢者だ。

ということは、一人暮らしの人が一人暮らしの人の家に毎日のように集まる。そこに民生委員が参加している、ということである。

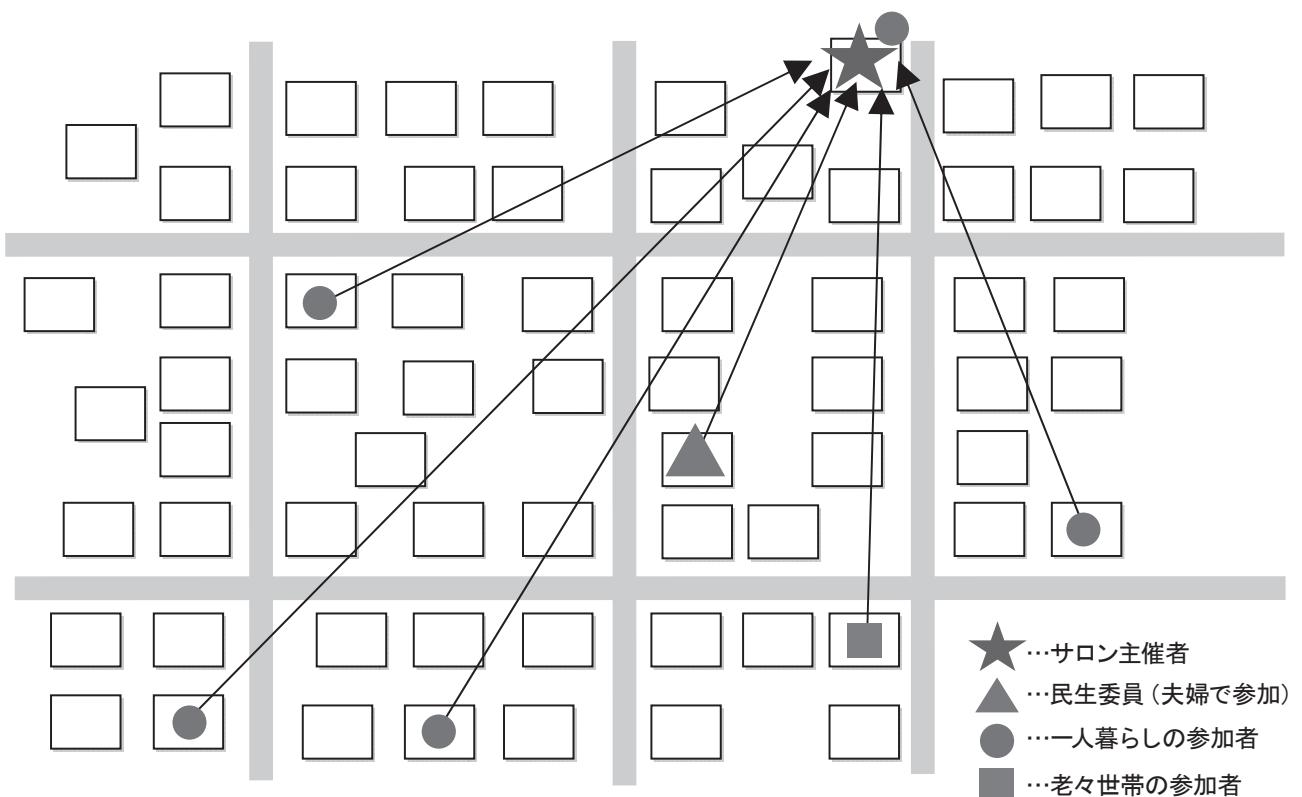
(2) 民生委員にとっては、「見守りの効率がいい」！

これを民生委員の立場から見るとどうなるか。とにかくこのサロンに参加すれば、一人暮らし（や老々世帯）の人たちの安否が分かるし、福祉ニーズも分かる。こんなに都合の良いやり方はないではないか。こういう仕組みを意図的に考えたのかどうかは分からないが、結果として、要援護者があふれる地域で必要な見守りのあり方の一つになっている。つまり要援護者の側も、なるべく担い手が活動しやすい態勢をつくるということである。

(3) 毎日サロンに来れば丸裸になったも同然

要援護者が自分の安全を守るためにできる一番大事なことは、自分の状態をできる限りオープンにすることである。一人暮らしの人の中には、引きこもりの傾向があって、周りが関わろうとすると「プライバシー」と言ってピシャリと戸を閉めてしまう人がいるが、これは全く理屈に合わない行動だ。人間は、自身の安全を確保するためには、要援護になるほど自分の存在を周囲にさらす必要がある。一人暮らしで要介護となれば、ある意味、自分を丸裸にするぐらいでなければ身を守ることはできない。

その点で、サロンに参加することは、その方向に努力しているということでもある。毎日のように参加して、仲間とおしゃべりをしている間に、結局は周りの人から見たら、丸裸になったのも同然になるのだ。自分をさらすということには大抵の人は抵抗を感じるし、容易ではないが、この方法ならやりやすい。特にその中に世話焼きさんが混じっていれば、進んで悩み事も言えるはずである。



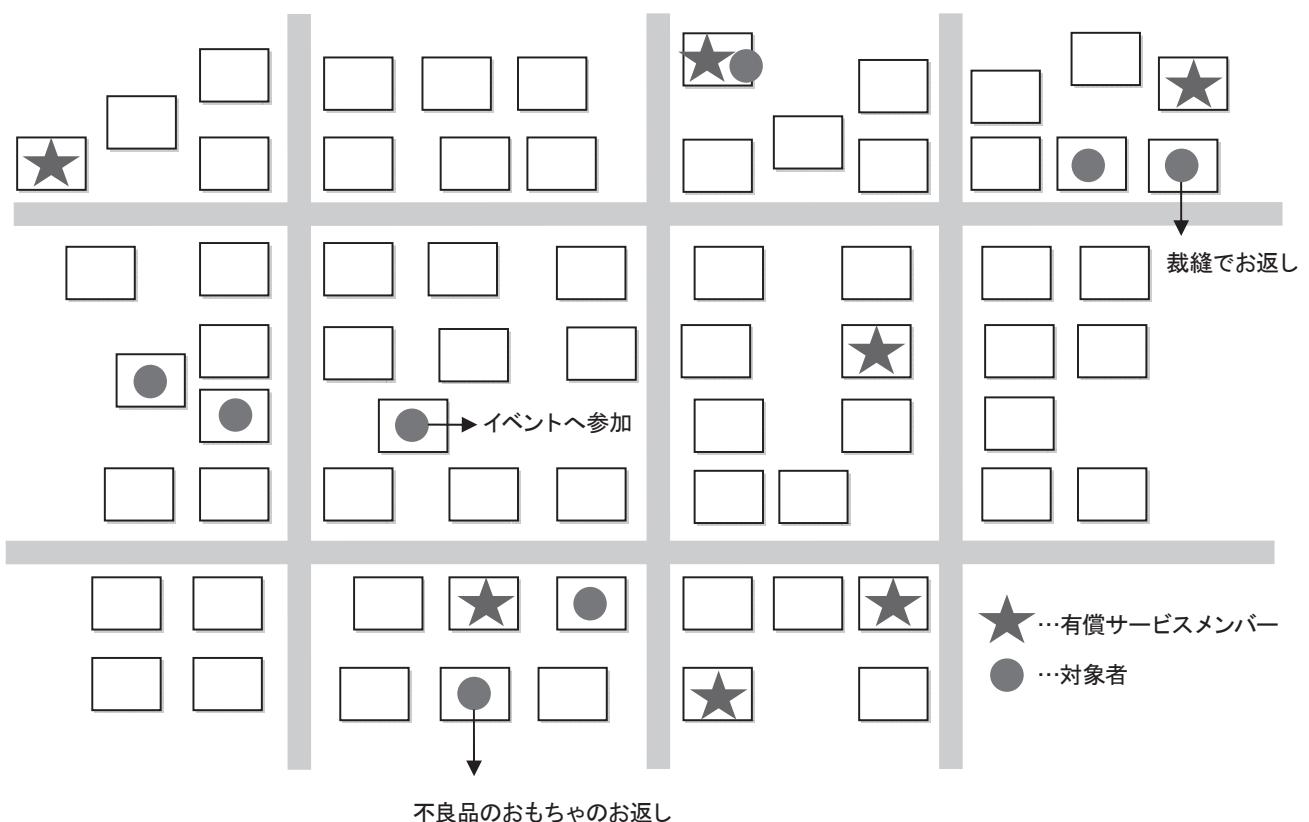
8 「有償」の導入でご近所助け合いを強める

(1) ただの有償では助け合いは育たない

有償サービスが広がっている。無償の助け合いに比べて依頼する方もお願いしやすいし、少

し料金をいただければ、無償ではできない、やや大変なサービスもできる。ということで、ご近所の助け合いを強めるために、この有償サービスを使えないかというのは、誰もが考えていることである。

ところが、いざ有償サービスを立ち上げると、まるでビジネスのようになってしまふ。払った方は「ご苦労さん」と言って、それで双方の関係は消費者と事業者の関係になってしまふ。助け合いにはならないのだ。助け合いといえば、一方が「おそらく分け」をすれば、相手が「お返し」をする。それが延々と続いていく。ところが有償だと、「あとくされがない」と言う人もいるように、お金を払った時点で関係は切れてしまうのだ。



(2) ワンコインでゴミ出し専門にしよう

では有償をどのように使えば、助け合いを発展させるのに役立つのか。このマップの地区で、ボランティアたちが有償を立ち上げた。といっても、わずか100円でゴミ出しを手伝いましょうというのだ。たったの100円だから、払ったという感じがしない。やってもらうことも、ただのゴミ出し。一見、負担感が全くない。

たまたまある人がゴミ出し中に骨折し、6か月の入院を余儀なくされた。その間、隣人が重いゴミ出しを手伝ってあげていた。これにヒントを得て、まずゴミ出しから始めようと発案。

- ◆要望が来ないと見ると、押しかけサービスを始めた。
- ◆庭で盆栽の手入れをしている人がいる。しかし背の高い所はできていない。そこで近くのメンバーが、「高い所は私が」と手伝ったら喜ばれた。

- ◆ご近所さんがお隣のゴミ出しを手伝っている事例も見つけた。
- ◆要望に応じた後、「他にやってほしいことは?」と聞いたら、ガラス拭きをやってほしいというので、200円の追加料金でやってあげた。

(3) 本来不要なはずの「お返し」が始まった！

その後に、興味深いことが始まった。サービスの利用者から「お返し」が始まったのだ。もともと有償というのは、その「お返し」を不要にしようと始まったのだが、なぜかお返しをするようになったのだ。

ある利用者は、自分の娘が東京のおもちゃメーカーに勤めていて、訳ありのおもちゃをお返しの品にした。これは「お返し」のルールに合致している。「東京の物」だけど「訳あり」。品はいいが、不良品だから遠慮する必要はない。

ある人は、お裁縫の手作り品。またある人は、いつもは参加しない地域イベントに参加するという「お返し」。このように、お返しとして何がいいかを考えるところもいいのだ。

(4) みんな「ご近所」の狭い枠内にいた

ではなぜ、お返しが不要なはずのサービスに、皆お返しをするようになったのか。お返しをするということは、自分も助け合いの輪に入ったのだという意思表示なのだ。ではどうしてそう考えるようになったのか、理由ははっきりしている。

①有償とはいえ、たったの100円である。このサービスを受けた側は、100円が十分な手間賃とは思わない。つまり、まだ返礼はしていないという意識なのだ。なにか「お返し」をプラスしなくっちゃ、となる。

②サービス内容が、ゴミ出しである。サービスしてもらったという負い目は感じない。おそらく分けをもらったという程度だ。

③有償サービスの範囲が、自分たちがご近所と呼んでいる50世帯の中である。ご近所中の福祉の営みは助け合いと言う。

④サービスしている人たちもまた同じご近所の中の住人である。助け合いの仲間だ。

これらのこと頭に入れれば、ああ、これはサービスではなくおそらく分けの営みなのだなど分かる。それにはお返しをすればいいと。

(5) ゴミ出しをご近所さんに手渡していくはホンモノ

しかしいつまでたっても、彼ら一部の人たちによるゴミ出しサービスを続けていると、住民の意識も変わっててしまう。「これは彼らの有償ボランティアなのか」と。ではどうすればいいか。サービスの中で、お隣のゴミ出しを引き受けている住民を何人か発見したという。本来はこのように、それぞれが足元の要援護者のゴミ出しを手伝ってあげればいいことである。そ

ういう営みを発見し、バックアップしていくことが、次なる課題になるのだ。またはその次に求められるサービスを発見する。またそれを住民に手渡していく。といったやり方が定着すればいいのだ。

9 要援護者をお楽しみの仲間に

(1) 健常者と要援護者が棲み分ける地域一介護保険の副作用

介護保険が始まって以来、住民におかしな行動が出てきた。要援護者は介護保険のお世話になるのだから、我々は元気な者だけでお楽しみをすればいいと。だからサロンや老人クラブは要介護者を受け入れなくなった。地域は要援護者と健常者が棲み分けるようになったのだ。

しかし釜石のように要援護者があふれる地域では、そんな棲み分けは現実的でなくなってしまう。いずれ地域の主流は要援護者で、その人たちが作るサロンに健常者も入れてもらうといった逆転の構図になるかもしれない。

(2) 認知症や精神障害の人も、デイ利用者も受け入れ

次のマップを見ていただきたい。少なくともこの地区では、棲み分けは行われていない。サロンの参加者が37人と大所帯である。そこに、認知症やアルコール依存症の人、知的障害の人などが加わっている。リーダーが「私たちは認知症の人も受け入れる」と宣言した。

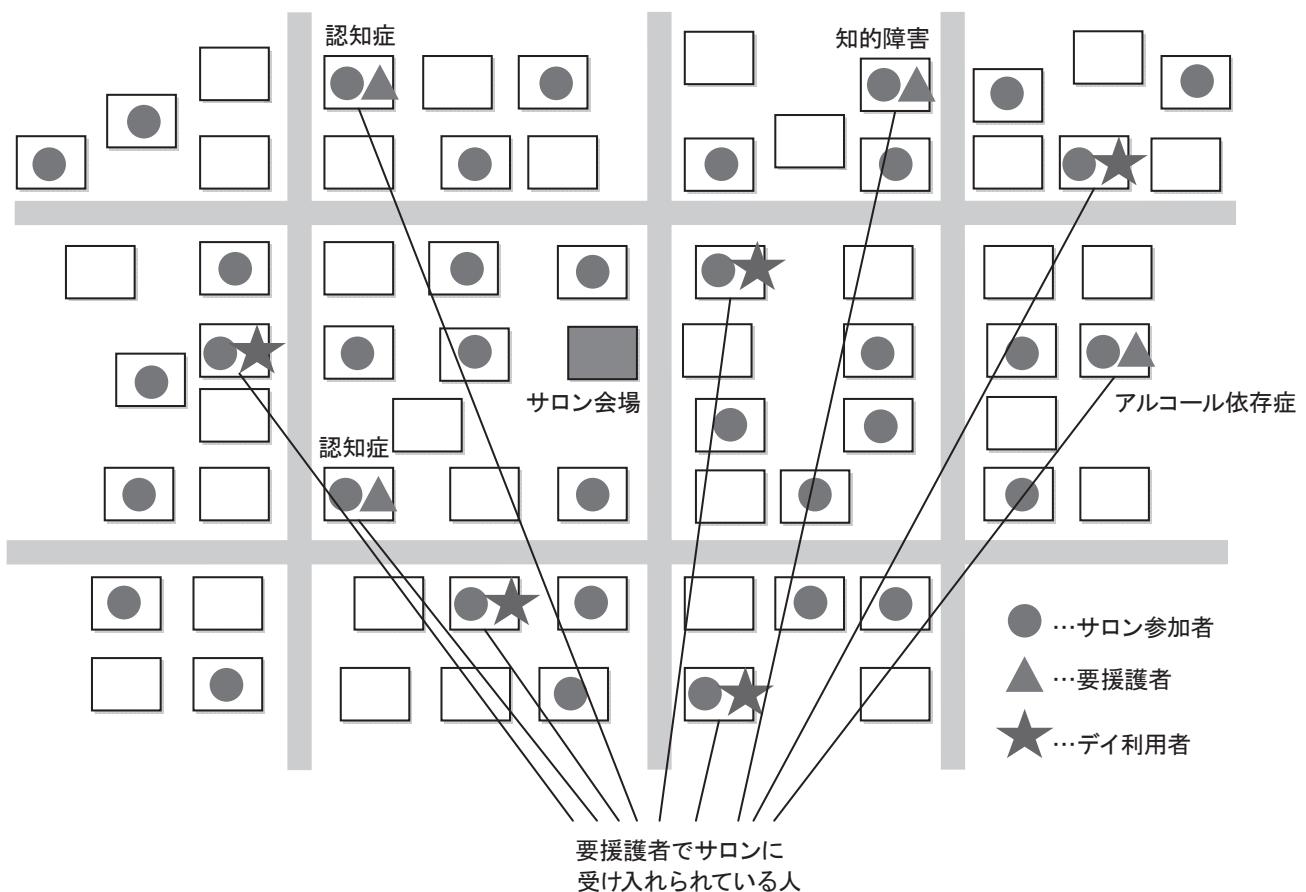
また、デイサービスを利用している人たち10人のうちの半数、5人も受け入れられている。必要な人には移送サービスが行われている。

(3) 「助け合いサロンにしたい」

リーダーはまた、「助け合いサロンにしたい」と言っているという。既に述べたように、サロンで2時間も3時間も一緒にしゃべりすれば、それぞれが福祉ニーズを発信するし、それをサロンとして受け止めれば、立派な助け合いの場になるのだ。

現実論で言えば、それが可能になるための条件は世話焼きさんがメンバーに入っていることで、その数が多いほど助け合い活動が始まりやすくなる。人々はこういうふれあいの場に參加した場合、そこでニーズを発信してみて、それに反応してくれれば、このグループは頼もしいグループだと判断する。その反対に、何の反応もなければ、いずれは退会しようとなる。

障害者や認知症の人も複数含まれているので、地域包括支援センターなどのプロが毎回参加して、出てきたニーズにメンバーと一緒に即反応すれば、効率的にニーズ発掘ができる。



(4) 一緒のお楽しみが活動そのもの。しかもニーズが掴みやすい

今広がっている要援護者と健常者の棲み分けが行われている地域では、何よりも当事者のニーズが掌握しにくいくい。

元気な人だけでいれば気楽だという気持ちは分からぬではないが、誰だって、いつ要援護になるか分からない。自分が要援護になったとたん、そこから脱落してしまうよりも、いま所属しているグループを、助け合えるグループにしておく方がいいのではないか。

しかも、お楽しみグループというのは、そこで一緒に楽しみ活動をしている中で、要援護者がいろいろ面倒をかけ、それに周囲が対応していれば、それだけで助け合いが始まる。つまり一緒に楽しみをすることが、即助け合いの活動になるのである。そして一緒にいれば、相手のニーズも見えてくる。両者がサロン等で共に過ごすというのは、助け合いを進めるための好条件なのだ。

10 住民と当事者の協働でご近所の福祉力を極大に

これまでの8つの項目を見ていくと、担い手と受け手の両者にそれぞれやるべきことがあって、それらがうまく機能すれば、要援護者を十分受け止められるご近所になっていくことが分かる。

(1) 当事者側の役割

この中でも特に新しい視点があるとすれば、当事者の役割が大きいという点か。

- ①当事者同士、特にお隣同士が、ペアで助け合う。
- ②助けられ上手の人はその役を生かして、ご近所内の多くの資源を活用する。そうすることで当事者のリーダー的な役割を果たせる。
- ③支援者が関わりやすいように、また家に入りやすいように、自らをオープンにする。要援護度が高い人ほど、プライバシーよりも安全（支援の受け入れ）を優先する。
- ④担い手が関わりやすいように、当事者がサロンを開いたり、グループを作り、そこに担い手を受け入れる。これで担い手は効率的に当事者に関わることができる。

(2) 担い手側の役割

- ①世話焼きの資質を持っている人は、その資質をフル稼働させる。特に大型世話焼きさんの役割は大きい。そのご近所の助け合い全体を仕切るとともに、関係機関との連絡の窓口役も果たす。
- ②年を取ればとるほど、また要介護度が増すほど、様々な特異な行動をとる人が増える。認知症の人も同様だ。それでも地域の一員として、さらには助け合いの輪の仲間として、心地よく生きていけるような配慮が求められる。どんな人も排除しないご近所づくりである。
- ③当事者は、助けられる一方ではプライドの危機に陥る。そこでその人が持っている能力を掘り起こし、それが生きるように支援をする必要もある。
- ④要介護の人への関わりも本格的に進める。そのためには、本人の家に入っていく必要がある。介護経験者や世話焼きさんはその資質を十分に生かす。その場合に、本人の家族がそれを拒否することで障害にならないよう対応していく必要がある。
- ⑤今のように要援護者と健常者が棲み分けているようでは、助け合いは始まりようがない。地域のグループが要援護者を受け入れることができなければならぬ。担い手側の大きな役割だ。
- ⑥ご近所の助け合い力を強めるために有償制を導入してもいいが、これはあくまで、ご近所での助け合いを強めるためのものであることを忘れてはならない。一定のご近所ごとに制度設

計をする。当然担い手も自分の住んでいるご近所に限定して活動する。そしていつまでも自分たちの手で活動し続けるのではなく、ご近所さんに手渡していく。

11 ご近所で要援護者と健常者が「豊かになり合い」

マップ作りで出てきた事実と、それを基に整理したご近所福祉のあり方を念頭に入れて、これから釜石市でどんな地域福祉を構築していったらいいのかを考えてみよう。

(1) ご近所ごとに完結した助け合い

マップ作りで見えてきた事実の一つに、人々は50世帯程度ごとに助け合いをしているということがあった。高齢者であり、同時に要援護者である人がかなり多数を占める釜石では、助け合いをするにも、福祉サービスを受けるにも、また豊かな生活をしようとするにしても、それらはご近所という狭い圏域でしかできないという事実に基づいている。

ふれあいサロンを数百世帯の圏域で実施しても、要介護者はご近所からそこまで行けない。それ以上に、彼らが実際に50世帯の中である程度助け合っているということがマップ作りで分かったのだから、これからの釜石市の地域福祉は、ご近所での助け合い推進を基本に据える必要がある。

ご近所ごとに完結した助け合いをするということは、ご近所の問題は基本的にご近所さんたちで解決するようにすることである。今まででは、ほとんどの場合、何かが起きてもお互いにご近所さんには頼らないという習慣ができている。それだけ助け合いは簡単ではないということだろうが、これからは、まだ頼りないとは思うが、できる限りご近所さんに頼るようにする。

関係者も、勝手に自分たちで解決してしまうのではなく、できる限りご近所さんの後押し役に下がる。難ケースも、可能な限り世話焼きさんや本人が見込んだ人を通して解決していく。「ご近所を立てる」ことから、ご近所の自立意識は生まれてくるのだ。

関係機関のスタッフが個別のケースに関わる場合も、当事者が所属するご近所を強く意識し、そこを仕切っている人、世話焼きさんを通していく必要がある。というのも、当事者はすでにご近所内の誰かを頼っているかもしれないし、誰かが何らかの形で関わっているかもしれない。住民の助け合いを進めるためには、これまでのよう 당事者やその人の問題をご近所から切り離して解決するのではなく、ご近所の助け合いの関連の中で解決策を見いだしていくという新しい手法を開発していく必要があるのだ。

(2) ご近所福祉のバックアップ役－ミッドフィルダーの配置

ご近所福祉がなぜ重要なのか。地域は3つの層に分かれていると関係者は考えている。第1層が市町村圏域（数万世帯）、第2層が校区（数千世帯）、第3層が自治区（数百世帯）。しかし私はそのあとに第4層があると考えている。これがご近所だ。平均50世帯。関係機関はまだ認知していないが、ここは大変重要な圏域なのだ。何よりもここに当事者がいて、要援護であるから、ここから容易には出られない。だからサービスは市域ではなく、このご近所の中で行われてほしいと願っている。ということは、ここが地域福祉の中核になる圏域とすべきなのだ。

幸いなことに、マップ作りで見えてきたように、ここには世話焼きさんがいるし、当事者もそれぞれ自助努力をしている。それができる狭い領域なのだ。

だから関係者も、当事者を第1層や第2層に呼び寄せるのではなく、まずはご近所に出かけて、そして当事者の周辺の人たちを上手に生かしながら、ご近所さんと一緒に問題を解決していく必要がある。

ご近所力は侮れないものがあるが、今一つまとまりがない、と言うよりは、まとまろうという意思が存在しない。それがご近所活動の特性なのだが、それでは助け合い力がなかなか強まらないという問題もある。そこで住民の自由な個々の活動を上手に生かしながら、より強い福祉にしていくための支援者が必要だ。事例の中では、有償サービスをご近所福祉に仕掛けていたるケースがあった。

そこでも述べたが、ただむやみに福祉サービスを強引に導入したのでは、ご近所さんたちの意欲をくじくことになりかねない。有償という手法を導入しながら、それを通して助け合い力を強め、それが育った頃、有償は自然に消えていくように仕組む。いわば「ギブス」をはめ、頃合いを見計らって、それをはずしていく。こういう高度なテクニックを使っていくのだ。

ご近所の助け合いの実態をマップ作りで浮き彫りにし、そのご近所の助け合いのパターンを見定め、その方向でどういう働きかけや援助をしたらいいのかを考える。必要に応じて関係機関の力も導入する。こういうことができる人材をご近所ごとに配置する必要がある。

この役割は、誰でもできるというものではない。世話焼きさんだからできるというのでもない。私は超大型世話焼きさんと呼んでいる。大型世話焼きさんは、足元の要援護者の面倒を見るのがメインの活動だが、超大型世話焼きさんは彼等とは本質的に異なっていて、人材を上手に「動かす」資質がある人だ。その能力のある人なら、民生委員といった肩書がなくても、人を生かせる。

今回のマップ作りでは、この人材を掘り起こすことはしなかったが、それぞれのマップに登場している大型世話焼きさんの中にいるかもしれない。その人のスケールの大きさによって、2つのご近所をバックアップするのが手一杯という人から、500世帯ぐらいまでなら人を動かせるという人もいる。釜石市にもいるはずのそうした人材を掘り起こして、ミッドフィルダー役を務めてもらうといい。これは福祉のプロだからできるというものでもないので、今述べたような探し方をする以外にない。

(3) 目標は－当事者も健常者も共に豊かに生きられるご近所づくり

最終的に私たちはどんなご近所を作っていくのかについての、共通認識を持つ必要がある。ただ、どんなに要介護者があふれてもその人たちを支えられるご近所をつくるというだけでは足りない。

もともと福祉は、何を目指すのだったか。厚労省は、福祉の目的についてこう述べている。どんなに重い要介護でも住み慣れた地域で自分らしく生きられるようにと。各自の自己実現を応援するのが福祉だというのだから、とてもなくレベルの高い福祉で、今の関係者はとてもついていけないはずだ。しかし厚労省は本気のようで、地域包括ケアシステムの構築に関しては、この主張を取り上げている。

「私はこういう人生を生きたい」と思う。それを要介護になってもあきらめない。ごく簡単に言えば、豊かな生活を最後の最後まで実現させなさいということか。つまり、豊かな家庭を持ち、健康づくりに励み、趣味を持ち、おしゃれや旅行を楽しみ、ふれあいをし、人の役にも立てる。できれば仕事をして若干の収入も得たい。これらの中から自分のライフスタイルに合致したものを優先するのだ。

これを「どんなに重い要介護でも」と厚労省は言っている。

こういう願いを要介護になっても実現したいとなれば、それなりの条件がある。ふれあいをするために集会所へ出向く、学習をするために公民館に行く、健康づくりのために保健センターやジムへ行く、ボランティアをするためにボランティアセンターへ行く、仕事を探すためにシルバー人材センターへ行く。だが、要介護になったらそれはできにくくなる。どうするか。そういう施設や環境を、要介護者のいる個々のご近所へ持っていくかねばならない。

実際にはそんな面倒なことは必要ない。誰かの家で趣味活動をすれば、そこが公民館と考えればいい。それを楽しめる場が、ご近所内にあればいいことである。

そんなご近所ができれば、健常者も助かる。と言うより、健常者と言われている人たちもいずれは高齢者になり、要介護になる。その時になっても豊かな生活がご近所ができるというのは、こんないい話はない。釜石のように、すでに高齢者が主体となった地域では、今からそういうご近所づくりをやっていかねばならない。

そうなれば、同じご近所で豊かな生活をするために、健常者と要介護者が、ご近所内のあちこちで出会うことになる。そこで当事者からニーズが発信され、健常者が受け止める。両者が「共に豊かに」を実践できるだけでなく、今まで以上に助け合いが広まるのだ。当事者は助かるし、世話焼きさんは足元にたくさんの対象者が増えるのだから、やりがいがある。

(4) 無手勝流で、理想の街を釜石につくろう

今述べたように、目指すべきは「ご近所で共に豊かに」ということであり、これをもし釜石で実現できれば、わが国で最先端の福祉のまちを作り上げることになる。今は外目には、恵まれた環境とは言えない状況になっている。被災地で復興はまだ半ば、自然は相変わらず厳しく、しかも高齢者ばかりで、要援護者はすこぶる多く、にもかかわらず人材と目される若者は少ない。人々が生きていく上の資源がなさすぎる。

そんな場所に理想の福祉のまちを作ろうというのは、何かピントが外れているのではと思われるかもしれないが、そうではない。

ちょっと考えればわかることだが、私たちが目指している理想のまちづくりは、モノやお金は大して必要としない。人間が豊かに生きるために必要なのは、そういうものよりも、どんな悪条件でも助け合って生きていこうという気持ちである。環境的に追い詰められているがために、かえって人々は必死に助け合おうとしている。そのための方法はここまで述べてきたようなことで、それを実践するのにお金もモノも、それほど要しないことはご理解いただけるのではないか。

今行われているハード中心の福祉は、お金がなければできない類の福祉だが、釜石ではソフト中心の福祉を進めることになる。要援護者が多いといっても、助けられ上手さんなら、助け手を容易に見つけられる。逆に人の助けになることで、自らの問題解決を図るといった、驚くべき発想も使われている。要援護者同士はそれぞれペアで助け合っている。少ない資源を皆で「共同活用」もしている。物質的な環境に恵まれなくても、助け合いのまちはできる。無手勝流の福祉である。

これがうまくいけば、ハードに頼れない状況であるからこそ、これを生かして、最前線のまちを作り上げることができる。社会のあり方としても、福祉のまち作りのあり方としてもだ。

「まちづくり」といっても、釜石市という一つのまちをつくることではない。人々は50世帯という小さな世界で、既にそれなりの助け合いをしていて、その規模だからこそ機能している。だから助け合いのまちづくりとは、助け合いのご近所を、釜石の中に数百個つくるということである。